

ハードボイルドを夢見て

ブローティガンが描く「ダメ男」のサバイバル

菅井 大地

リチャード・ブローティガン (Richard Brautigan) のパロディ小説『バビロンを夢見て』(*Dreaming of Babylon*, 1977) は、「ダメ男」をめぐる物語といっても過言ではない。1960 年代のヒッピー文化と図らずも親和性をもってカルト的人気を博したブローティガンは、60 年代の終焉とともに忘れ去られてしまったが (藤本 96)、「ダメ男」という観点からこの作品を読み直すと、伝統的な「強い男性」という男性性規範から逸脱する男性の生き方を肯定する視座が浮かび上がる。ハードボイルド探偵小説のパロディとして描かれるダメな私立探偵 C. Card の物語は、社会的弱者としての「ダメ男」が依存関係によって都市社会をユーモラスに生き延びるさまを描き出しているといえよう。本発表では、Card をはじめとする「ダメ男」たちが、「強い男性」という規範から逸脱し、アメリカ社会から除け者にされた障害者として理解できるのではないかという読みの可能性を提示したうえで、彼らが相互依存 (ケア) によって生き延びる道を模索していることを指摘する。これにより、「孤高のハードボイルドな男性」とは異なる男性性の在り方を肯定するものとして、本作品を再評価できるだろう。

1970 年代の男性性——ハードボイルドへの抵抗

1970 年代のアメリカでは、男性が自身の心情やセクシュアリティを告白するような文化的土壌が生成されつつあった。従来の「無口で強い男性」という男性性規範に対して疑問を投げかけ、「ソフトな」男性の在り方を模索する時代が到来したのである。しかし、必ずしもそうした「ソフトな」男性性が主流の言説として従来の男性性規範に取って代わったわけではないと James Penner は指摘する。むしろかつての男性性規範への回帰を示唆する文学作品なども出てきており、いわば二つの価値観の間で揺れ動く時代であった (Penner 340)。

また、ハードボイルド探偵小説には、市場原理に従って個人の自由を推し進めると無秩序な社会が生まれるという前提が存在する (McCann 8)。つまり古典的リベラリズムに従って構築された社会は、利己主義や個人的欲望に支配されており、そうした社会に対して強い男性としてのハードボイルド探偵が立ち向かうというのが、探偵小説の基本構造となる。McCann が想定しているのは 1920 年代ごろのハードボイルド小説とその社会背景だが、アメリカ社会がニューディール期を経て、再び個人の自立 (自律) を求める新自由主義的社会に突入しようとする 70 年代に、ブローティガンがハードボイルド小説のパロディを描いたことは偶然ではない。新自由主義的政策によってアメリカ社会が再び個人主義に傾き、女性の社会進出が促された反面、従来の男性性は大きく揺らぐことになる。仮に、従来の男性性規範に疑問を呈するのが 70 年代的風潮であるならば、ブローティガンは自立 (自律) した個人を前提とする社会に対して、ハードボイルド的抵抗を示すのではなく、自立 (自律) した個人としては生きられない「ダメ男」を主人公に据えて、ハードボイルドな男性性のパロディを試みたといえるのではなかろうか。

ブローティガンが描く「ダメ男」

『バビロンを夢見て』の主人公 Card は、第二次大戦中のサンフランシスコで私立探偵を生業にしている。しかし、彼は従来のハードボイルド探偵像とは乖離した人物である。冒頭から、兵役検査において F4 の烙印を押され、精神的にも肉体的にも従軍できない人物であることが明かされる。また、家賃を支払うことができずにオフィスを引き払うことを余儀なくされ、自身のアパートの家賃も滞納中という始末。さらに、かつての女性秘書との恋愛関係もうまくいかない。つまり、私立探偵業はうまくいかず、経済的にもどん底で、かつ恋愛もできないというように、物語の冒頭から Card の「ダメさ」が際立つ。

彼が都市社会においてまともな生活を送れないことの原因として大きなのは、彼の夢想癖である。タイトルが示す通り、彼はバビロンを夢見て日常を過ごし、そのせいで様々な失敗をする。“Whenever I was trying to get something done and Babylon started coming upon me I’d try to focus on anything that could keep it away. It was always very hard because I really like to dream of Babylon and I have a beautiful girlfriend there” (Brautigan 14) とあるように、彼はバビロンを夢想することがどうしてもやめられない。そして、バビロンでの空想上の生活において、Card はハードボイルド男性の規範にのっとった世界を構築する。

このようにハードボイルドな世界を作品内の非現実として夢見ることは、ハードボイルド小説と男性読者と

の関係性をもパロディとして描き出すことになる。Michael S. Kimmel によれば、ハードボイルド探偵小説は、“male escapist fantasy”として男性読者の欲望を引き受けているという(141)。こうした探偵小説と読者との関係性が、ブローティガンの作品内では、Card の白昼夢として再現されるのである。

ディスアビリティとしての「ダメ男」

ブローティガンは「強い男性」という男性性規範の典型としてハードボイルド探偵小説の構造をターゲットと措定し、そのパロディとして「ダメな探偵」を描く。また、Card のみならず、その他の男性登場人物の多くも社会から除外された弱者男性であることは注目に値する。特に、彼らの「ダメさ」はディスアビリティとして解釈することが可能であり、そのような弱者男性の相互依存関係は「強い男性」という規範から逸脱したまま生き延びるための戦略となる。

まず、Card につきまとう白昼夢は、野球ボールを頭部にぶつけられたことがきっかけで出来しており(Brautigan 57)、外的な要因からディスアビリティになったことは否定できない。さらに、Card には「にぶいところがあり(I was kind of slow)」(Brautigan 5)、身の回りのことがきちんと出来ないなど、発達障害が示唆される。また、Card の友人であり死体保管所で働く「義足(Peg-leg)」は、本名ではなく身体的特徴である「義足」と呼ばれ、かつ死体性愛的な欲望を持つことがほめかされる。この「義足」は、娼婦の死体を盗み出すという Card の任務に協力的である。もう一人の友人は片腕を戦場で失った曲芸師の Sam だが、彼は四肢欠損の男性を好む女性と結婚して養ってもらっており、“A guy’s got to keep moving”(Brautigan 66)と述べて現状を肯定的にとらえている。この Sam のセリフから窺えるのは、自活できる男性とは異なる男性の在り方を模索しながら生きるという、オルタナティブな男性性であろう。

ブローティガンは、これらの弱者男性の依存関係を描き出す。それぞれの人物がそれぞれのやり方で、ときに依存しあいながら生き延びていく。ハードボイルドに集約される「強い男性」からは距離を置き、社会からはみ出した人々との間で依存関係を結びながら「ダメ男」のままで生き延びることを、肯定的な可能性としてブローティガンは語るのである。

「ダメ男」の生存戦略——相互依存(ケア)の可能性

最後に、「ダメ男」のケアの可能性に言及したい。ケア・コレクティヴによる『ケア宣言』では、ケアが軽視されてきたことと男性性規範を結びつけて、「ケアへの依存」が「病理化されてきた」ことが指摘される(41)。Card と彼をとりまく男性たちが障害者として登場することは、ケアの病理化と無関係ではないだろう。男たちが生きていくうえでケアを必要としていることは、「強い男性」という規範においては不可視にされている。しかし、この作品で前景化されるのは、社会的弱者の男性による相互依存を通じた生存戦略である。従来の男性性規範では掬い上げられなかった弱い男性たちは相互依存によって都市社会を生き延びようとしているのではなかろうか。ブローティガンはハードボイルドを下敷きにしつつ、社会から逸脱した者たちの依存関係を描き出す。言い換えれば、誰かに依存しない自立(自律)した男性こそが強い男性だというハードボイルド的男性性は、人間同士による相互依存関係を無視したうえに成り立つ。こうしたハードボイルド的構造をパロディにすることで、ブローティガンは、「ダメ男」たちが相互依存によって生き延びる道を模索しているのである。

引用文献

- Brautigan, Richard. *Dreaming of Babylon: A Private Eye Novel 1942*. 1977. Houghton Mifflin, 1991.
- Kimmel, Michael S. *Manhood in America: A Cultural History*. 2nd ed., Oxford UP, 2006.
- McCann, Sean. *Gumshoe America: Hard-Boiled Crime Fiction and the Rise and Fall of New Deal Liberalism*. Duke UP, 2000.
- Penner, James. “The Confessional Turn: Masculinity and American Literary Culture in the 1970s.” *American Literature in Transition, 1970-1980*, edited by Kirk Curnutt, Cambridge UP, 2018, pp. 337-51.
- ケア・コレクティヴ. 『ケア宣言—相互依存の政治へ』岡野八代他訳, 大月書店, 2021.
- 藤本, 和子. 『リチャード・ブローティガン』新潮社, 2002.